

Mr. Bassman (ベースマン列伝) vol.13

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥ぐともの凄いな。名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Earl May 【アール・メイ】



写真提供：後藤誠（音楽評論家）

【ブログ】Riffide: 後藤誠の Jazz and other matters (<http://riffide.exblog.jp/>)

Profile

1927年9月17日ニューヨーク州ニューヨーク生まれ。1949年からNYでプロとしての活動を始め、レスター・ヤング、チャーリー・パーカー、マイルス・デイビス、ソニー・スティット、ジーン・アモンズ等と共演。50年代初頭にチャールス・ミンガスにベースを師事。51年から59年まで、ビリー・テイラーのトリオに参加する傍ら、ジョン・コルトレーンやチェット・ベイカーをはじめ、数多くのレコーディングに参加。59年には自己のトリオを結成し、女性シンガー＝グロリア・リンのアレンジと音楽監督としても活躍。60年代には、ミッキー・ローカー、アル・フォスター、レイ・バレット等をメンバーに従えた自己のカルテットで活動し、ハービー・マンのツアーやレコーディングにも参加。60年代中期には、エレキ・ベースでも活動していた。71年～74年にはディジー・ガレスピーのバンド、80年～84年にはデューク・エリントン楽団、その後も、カウント・ベイシー楽団、キャブ・キャロウエイのHi-De-HOオーケストラ、フランク・フォスター・クイントット等で活躍。97年には、「ステイツメン・オブ・ジャズ」のメンバーとなる。その堅実で味のあるプレイだけでなく、右用のベースを左手で弾くという珍しいサウスポールのベースマンとしても有名だった。2008年1月4日、心臓発作のため死去。享年80歳。

ジャズ・シーンでは珍しいサウスポールのベースマン！

《玄人好み&いぶし銀のジャズ・ベースの名人》

渋いベース・プレイだけでなく、その優しく紳士な人柄でも愛されたベースマンだが、師でもあるチャールス・ミンガスやレイ・ブラウン、ポール・チェンバース等と比べると知名度は低いかもしれない。だが、60年近くに及んだ長いキャリアの中で数々の名演・名盤を残すなど、ジャズ・シーンに多大な貢献を果たした偉大なベースマンだ。

個人的には2005年と2006年に来日でも果たしたアール・メイにとって盟友でもある名ジャズ・ピアニスト、バリー・ハリス・トリオ（ドラムはリロイ・ウィリアムズ）でのプレイが印象深いが、その際にライブを行ったジャズ・ピアニスト福居良氏経営の札幌のライブ・ハウス「SLOWBOAT」の福居康子さんから、「一緒に過ごした時間はわずか10日間ほどにすぎないのに一生忘れられない想いを残して下さったのは、やはり素晴らしい音楽を通して温かく優しい心を伝えてくれたからでしょうね。若いミュージシャンに熱心に指導してくださった姿も忘れられません。アールさんのjazzへの愛は彼と出逢った人々にひきつがれていて信じています。」との言葉を頂いたように、その人柄も偲ばれる。

最初にアール・メイのプレイを生で見たのは90年代半ば、NYのライブ・ハウスで行われたフランク・フォスターのグループでのライブで、その際にサインも頂いたが、独特の「アール・メイ節」ともいえるそのベース・プレイは忘れられない。

Mr. サウスポール

ジャズ・シーンでは非常に珍しいサウスポールのベースマンだが、アール・メイは右利き用のベースをそのまま、弦を左右逆に並び替えることなくプレイするという更に珍しいスタイルをとっていた。（ギターでは、Babyface、甲斐よしひろや松崎しげる等が、同様に「右用を左で演奏」スタイルでプレイしている。）アール・メイの他にサウスポールのベースマンとしてJohn Leitham がいたが、近年性転換してJennifer Leitham となりベースウーマン（？）として活動している。（因みに、本誌発行人&編集人もサウスポールでウッドベースを弾いていた。）

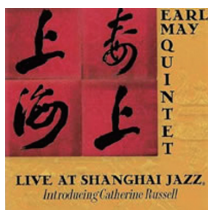
アール・メイを偲んで

2008年1月4日に亡くなったアール・メイ。本国アメリカでは、1月8日（火）にニュージャージーの「バプテスト教会」でお葬式が行われ、アール・メイ・バンドやバリー・ハリス等による演奏の他、大勢のジャズ・ミュージシャンが参加した。2月4日（月）にはNYの「セントピーターズ教会」でモリアル・サービスが行われ、こちらでもバリー・ハリス等による演奏が行われた。日本では、2月27日（土）に生前バリー・ハリス・トリオのメンバーとして来日公演も行った（上述の）ライブ・ハウス「SLOWBOAT」で追悼ライブが行われた。

EM's Leader & Featured Album

アール・メイのリーダー作は未だ国内盤ではリリースされていないが、機会があればぜひ一聴して、サウスポーから繰り出されるこのベースマン魂を感じ取って欲しい！

上海ジャズレコードからリリースされたアールのバンドのライヴ盤



Live At Shanghai Jazz Earl May Quintet

(Shanghai Jazz Records [Import])

Earl May (b), Catherine Russell (vo)
David Glasser (as), Larry Ham (p),
Eddie Locke (ds)

1. This Joint Is Jumpin' 2. Back O'Town
3. Laughing On The Outside
4. A Night In Tunisia 5.~13.

スペシャル・ゲストにバリー・ハリスを迎えた快作 & 最後のリーダー作



Swinging The Blues with Barry Harris The Earl May Quartet

(Arbors: ARCD-19320 [Import])

Earl May (b), David Glasser (as),
Larry Ham (p), Eddie Locke (ds),
Special Guest: Barry Harris (p)

1. Swinging The Blues 2. Blame It On My Youth 3. My Foolish Heart 4. Tea For Two
5. Blue Iridesence 6.~13.

ビリー・テイラー・トリオの名盤
50年代のアールの魅力がギンシリ！



Billy Taylor Trio with Ed Thigpen & Earl May Billy Taylor

(Lonehill Jazz : LHJ-10227 [Import])

Billy Taylor (p), Earl May (b),
Ed Thigpen (ds)

1. There Will Never Be Another You
2. Sounds In The Night 3. More I See You
4. Will You Still Be Mine? 5.~12.

アメリカはニュージャージー州のマジソンにあるレストラン & バー『Shanghai Jazz』で2000年に行われたアール自身のカルテットのライヴを収録したアルバム。ヴォーカルにキャサリン・ラッセルを迎え、アールがリーダーとしての力量を最大限に発揮し、グルーブのサウンドを支える。決して出しゃばることはないが、その存在感はさすが。アールのベースがフィーチャーされた「Night In Tunisia」をはじめ、このアルバムが記念すべき初レコーディングとなったキャサリン・ラッセルのヴォーカルも聴き所。全14曲収録。

カウント・ペイシーのナンバーでタイトル・ナンバーでもある「Swinging The Blues」で、軽快にオープニングを飾るアールの最後のリーダー作品。Arbors Recordsで2005年に録音され、盟友バリー・ハリスをスペシャル・ゲストに迎えた快作で、音楽の三要素（メロディ、ハーモニー、リズム）のコンビネーションも抜群のアールのベース・ワークが冴え渡る。全13曲収録で、特にバリー・ハリスがピアノを弾いている2曲「Tea For Two」「My Old Flame」は素晴らしい。謹んでアール・メイの冥福を祈りたい。

アールが1951年から参加していたビリー・テイラー・トリオの1957年の作品。ビリー・テイラーは黒人ジャズメン初の音楽博士号取得者で、75年に世界ジャズ協会理事の要職に就任するなど、ジャズ界の重鎮と称されたピアニスト。新ドラマーにエド・シグベンを迎え、スタンダード中心に抜群のトリオ・プレイが冴え渡る。ジャケットにサウスポーでベースを弾くアールの姿が写るライヴ盤『Billy Taylor Trio At Town Hall』(1954年録音)もいいが、こちらもお薦め！ スポシの文が短いのか、スネが丸見えのアールが粋だ！

EM's Support Album

長いキャリアの中で、サウスポーによる独特の演奏スタイルと同様、ジャズの名盤でも独特の存在感を放っていたアール・メイ。そのいぶし銀のベース・ワークは永遠だ！



Lush Life John Coltrane

(ユニバーサル: UCCO-9255)

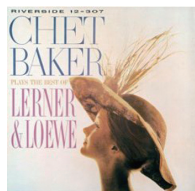
1~3曲目のトリオ演奏でアールがベースを担当。個性豊かで独特のラインを刻むアールのベースが光るコルトレーンの洩い名作。1957年録音。



For Lady Webster Young

(ピクチャーエンタテインメント: VICJ-41383)

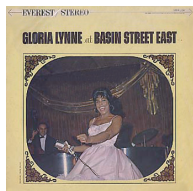
ウェブスター・ヤングがコルネットで吹き込んだ作品で、ビリー・ホリデイに捧げられた名盤。アールのベースが何とも味わい深い。1957年録音。



Plays The Best Of Lerner & Loewe Chet Baker

(ユニバーサル: UCCO-9295)

名ソング・ライティング・チームが手掛けたミュージカルのヒット曲を取り上げたチャット・ペイカーの作品。ビル・エヴァンスも参加。1959年録音。



At Basin Street East Gloria Lynne

(EVEREST: SDBR-1137 [LP/Import])

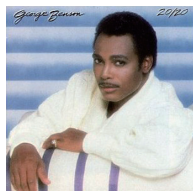
アールがアレンジ & 音楽監督も務めていた女性シンガー＝ゴロリア・リンのライヴ盤。アール・メイ・トリオにケニー・バレルも参加。1962年録音。



Bahiana Dizzy Gillespie

(Pablo Records : 2625-708)

70年代のデジー・ガレスピーの傑作で初のオール・ブラジリアン作品。ラテンの香り漂う味違ったアールのベースも楽しめる。1975年録音。



20/20 George Benson

(ワーナーミュージック・ジャパン: WPCR-75212)

豪華ゲスト陣が名を連ねたジョージ・ベンソンの名作。ベースではアールの他に、マーカス・ミラーやネイザン・イースト等が参加。1984年録音。